

方法論としての「翻訳的適応」

書籍発刊セミナー

『途上国の産業開発と日本の経験 翻訳的適応から国際協力を考える』

2025年12月11日(木)

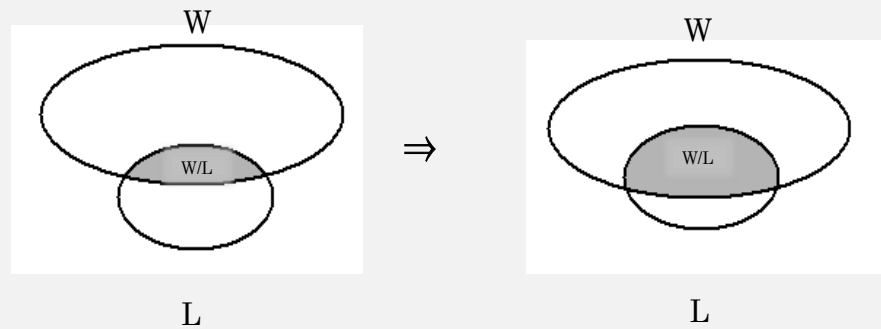
筑波大学名誉教授

前川啓治

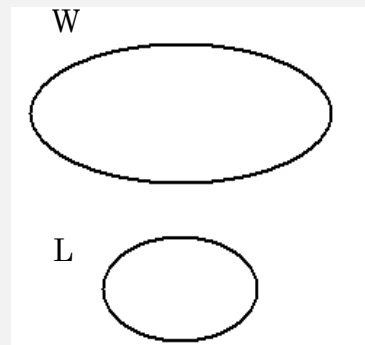
I . 原理

- 人類学者としてフィールドワーク
贈与論のオセアニア トレス海峡 ⇒ モデル
- 社会進化論的近代化論
(指標、実は観念論、背後に「世界システム」)
- 関係論的伝播論 = 構造ないしシステムの節合論
→ 内在的アプローチとして地域の主体性
⇒ 意味論を包括した翻訳 (読み換え) 的適応論—逆説的概念
- 近代的二元論を超える節合論からさらに翻訳的適応論へ

I . 原理



〔抽象的システム〕



近代世界システム（資本主義世界経済）

ローカルシステム＝地域「世界」

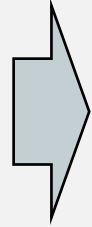
近代世界システムと非西洋地域システムの文化節合

I . 原理

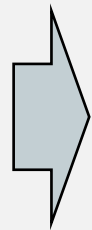
- レヴィ＝ストロースの(差異としての)構造論の応用モデル
- 人類学→経済人類学の新たなパラダイムすなわち近代の相対化
⇒近代と伝統の節合（サーリンズ）

Ⅱ．原理⇒応用

トレス海峡
「近代化」における逆説的現象
＝伝統的現象の興隆



日本社会とくに明治維新以降
和魂洋才（観念的レベルではなく、システムレベル）
伝統と近代の節合、ただし日本の伝統自体が節合による
近世—商業資本主義 近代—工業化＝産業資本主義
（中村医師の灌漑プロジェクト＝近世と近代の節合）



丸山眞男
近代化論
執拗低音

西田幾多郎
節合→相互適応論
通奏低音

ピュシス論（万物流転のヘラクレイトス）＝自然(じねん)論（アニミズム論を包括する）

Ⅲ. 応用 = 政策

- 学習（教育）論

学習において、「伝統」と「近代」の二項および「伝統」と「近代」の節合の関係性を捉える。
（「二元論」と「二項対立」は異なる）

- 複数経路融合説 適応と相互学習

- 適応→外部のものの内部適用

1. **伝統** ⇒（伝統↔近代）

2. **近代** ⇒（伝統↔近代）

（↔は関係性・相互作用、⇒は視点・アプローチ）

1. は「翻訳的適応」の原理

2. は「翻訳的適応」の政策的応用

さらに 1. と 2. の相互作用による総合化過程

IV. 含意

- フィールド（トレス海峡）における開発
先住民開発省（ADC）—認識論
⇒立体的な関係論的・存在論的アプローチ（ゆるやかなシミュレーションの生成過程）へ
- Development=開発&発展、日本の発展⇒途上国の開発 **カイゼン**など
- 伝統vs近代、ローカルvsグローバルではない(グローカル)
⇒狭義の経済分野や制度の領域だけでない、ピュシスの成長モデルへ
（政治経済学的視点：新自由主義の問題点、経済人類学者ポラニーの歴史的警告）
- 取り組み 筑波山麓地域の地域再生（古民家再生による公共性、観光基本計画）
フットパスによる観光地域づくり（観光と公共性の節合）